



36宿場町

**中山道
木曾路**

みやのこしじゆく

宮ノ越宿


町並み
木曾町

■基本データ

住所 木曾郡木曾町日義

アクセス JR「宮ノ越駅」から徒歩すぐ

連絡先 木曾おんたけ観光局
/TEL0264-25-6000



マップQR

宮ノ越宿が設けられたのは、1601(慶長6年)ころと考えられ、中山道の成立とともに江戸幕府によって設けられた宿です。

江戸時代後期の記録によると、宮ノ越宿は1842年(天保14)には宿内の家数137戸、人口585人、本陣1軒・脇本陣1軒、問屋2軒、旅籠屋21軒という規模でした。

1740年(源文5)の記録によると、この年大名の通行宿泊は上り32回、下り19回、計51回あったとのこと。

宮ノ越宿の歴史

1601年(慶長6)10月24日に京都伏見を発ち、出羽米沢に11月19日に到着するまでの26日間を記録した、『前田慶次道中日記』の中に「ふくしまも過ぎ宮のこしに留、やこ原、よし田、とりみ峠を下ればならみの町」と書いてあるところから、宮ノ越宿がすでに宿駅として

の役目を果たしていたことがわかります。

しかし、贅川・奈良井・屋小原(藪原)・福島は、1568年(永禄11)には宿駅として成立していたことが武田氏伝場口銭掟書でわかることから、宮ノ越宿は中山道成立とともに江戸幕府によって新しく設けられた宿であるといえます。

宮ノ越宿の位置・街並み

宮ノ越宿は、北の藪原宿へ1里33町(7.5km)、南の福島宿へ1里28町(7km)の距離にあります。また、江戸から66里35町、京都から66里22町の距離にあるので、中山道のほぼ中間に位置する宿場ということになります。宿内町並は、南北4町34間(498m)となっていて、贅川宿よりやや長い程度です。

中山道は藪原宿から吉田を通り、山吹山の山麓を巻いて巴淵上に出て德音寺集落に入り、引塚のところの往還橋で木曾川を渡り、宿は上町・中町・下町と通って、高札場の坂を上って原野へ出るような道筋となっていました。宿には松並木があり街道中央を用水が流れていました。

1701年(元禄14)からは、木曾十一宿の中で、贅川・奈良井・藪原とともに「上四宿」と呼

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

ばれ、合宿的な色あいを持って人馬調達を行うようになっていました。ちなみに福島・上松・須原が「中三宿」、野尻・三留野・妻籠・馬籠が「下四宿」と呼ばれました。

また、宮ノ越宿は1688年(元禄元)より、権平峠開削によって、伊那へ抜ける権兵衛街道の分岐点になりました。(日義村誌 歴史編上巻)

現代の宮ノ越宿の町並み

宮ノ越宿は街道に沿って北から南へ延びています。宿場の道巾は広く、東寄りに宿場用水が引かれていて水が勢いよく流れています。宿場の裏側には水田が広がり、木曾谷としては珍しく空がひらけている地形です。

旭町・上町・本町・中町・下町とつづき本町には本陣の遺構の一部が江戸時代のままの姿で残っており、問屋も隣接しています。木曾川を隔てて木曾八景の一つに数えられている「德音寺の晩鐘」で有名な德音寺があります。

町並みは建て替えられた家が多く格子戸の家はめっきり減ってしまいましたが、家々は屋号で呼ばれ現在も使われています。

旅籠屋も2軒残っているが現在営業はしていません。

1955年(昭和30)までは町用水に沿って松並木が残っていましたが、道路拡幅のため伐られました。(「朝日将軍木曾義仲」)



0 宮越本陣

本陣は公家・勅使・門跡・大名・宮・旗本・御茶壺道中・日光例幣使等、宿泊・休息の施設で一般者の宿泊は許されません。脇本陣は本陣では宿泊が出来ない場合の補助施設です。

問屋は荷物の継ぎ立で、人足、馬を用意します。宮ノ越宿では本陣と脇本陣が半月交代で務めました。

本陣は特別な人が宿泊するので、本陣の居住者の生活空間とは区別しました。建物の中に居住者(主人家族)と問屋業務の部屋をB居室部。大名等公の人達が宿泊するA客室部(御殿・客殿)とは明確に区別しました。

客室部に入るには街道に接して御門を、広い庭に入って玄関・式台・幾つもの畳部屋・料理の部屋・厠・風呂・庭等があり、特に部屋には大名が休む上段の間が必ずあります。

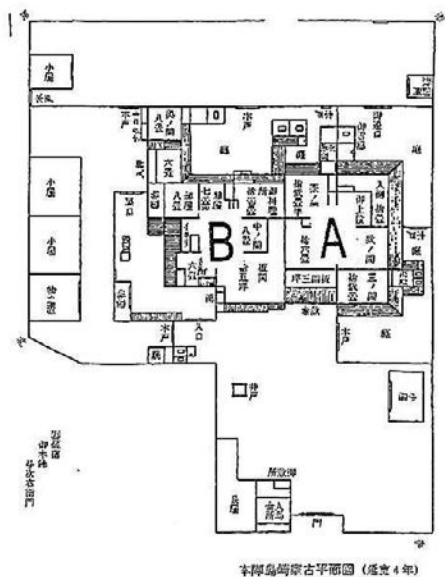
B居室部とA客室部とを並列する(例:妻籠宿)、前後を少しずらす(例:藪原宿)、別棟にする等があり、宮越本陣は別棟で前後に空間を置いて設置する非常に珍しい本陣です。

●一里塚

東海道や中山道の整備とともに、1里を36町(約3.9km)と定めて、里毎に一里塚を築かせました。塚に木を植えるにあたって、命令を受けた者が何の木を植えたらよいか伺ったところ、「並木が松だから、余の木を植えよ」といったのを「えの木」と聞きまちがえて、多くの一里塚は榎が植えられるように

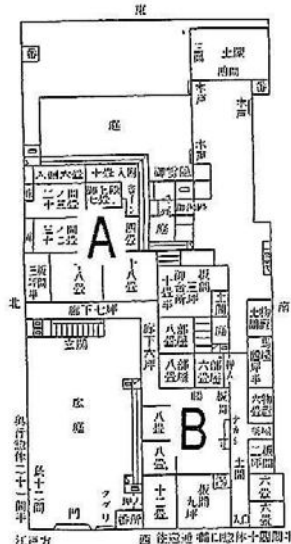
なったという話が残っています。

木曾では榎もありましたが、松も多かったようです。木曾は自然の樹木が街道筋まで茂っていたので、特に並木を造成することもなかったようで、一里塚の樹下だけでなく、いたるところに旅行者の休憩所となるところがありました。



妻籠宿

主客棟併列後退閉鎖型



萩原宿

主客棟後退型

2 萩原宿本陣屋敷図 (本根村郷土館所蔵)

●宮越宿本陣の特殊性

宮ノ越宿は何度も大火に会い本陣も焼失しました。火災後に先ず取り掛からねばならないのが本陣でした。公の人達の宿泊・休息に遅滞があってはならないために、離れて別棟にすれば客室部の類焼は免れる可能性がありました。この火災と再建工事で大工が必要になり、何度も火災での経験で大工の技術も高まり、大工職人も多くなり宮ノ越大工と知られるようになりました。

●なぜ宮越本陣が今日にのこったか？

木曾十一宿の中で本陣建物が残っているのは宮ノ越宿のみであり、全国的にも多くの本陣は無くなっています。幕末の大名を苦しめ、参勤交代にかかる経費も切り詰めざるをえませんでした。

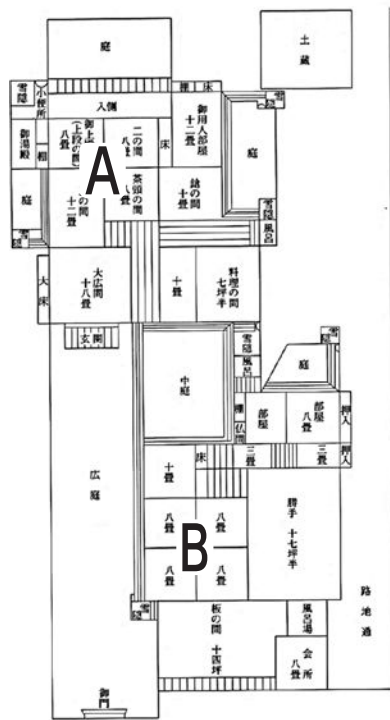
大名等の交通が中山道は少なく、気持ちの祝儀が本陣の収入であり、大きい建物の維持管理が経済的に大きな負担でした。宮越本陣でみると客室部の材を落したり、規模を縮小しています。

明治政府になると参勤交代は無くなり、1870年(明治3)の宿駅制の廃止で伝馬も扱わなくなり、収入が途絶したため、宿では最大の建物である本陣を維持できなくなりました。そのため多くの本陣は無くなりました。

宮越本陣は1865年(元治2)の上町大火(80戸余)では焼失しなかったと思われま。

1880年(明治13)の明治天皇木曾巡幸の時、宮越本陣で休息しています。この時には本陣建物はしっかり残っていて対応できました。

1883年(明治16)の大火で本陣居住部が焼失しましたが、客室部は火災を免れて、本陣の家族がここに居住するようになったので、客室部が今日まで残りました。居住するようになって客殿としての施設～御門・玄関・式台・広間・台所・廁・風呂場は壊して、主要な間である上段の間・二の間・三の間は、そのまま残し、その南の部屋を台所兼板の間・家族の部屋に直しました。



宮ノ越宿

図101 宮越宿本陣屋敷図 (年代不詳) (村上陽所蔵)

- 宮越本陣の重要性
 - ・木曾十一宿の中で唯一の本陣建物～特に客室部(客殿)遺構である。
 - ・客室部は明治天皇が休息された部屋である。
 - ・上段の間には床の間・違い棚・書院が残っている。



②「田中邸」

中山道宮ノ越宿の田中家は、宿絵図に旅籠屋田中忠右衛門と記された旅籠でしたが、1883年(明治16)の上町から下町まで九十戸を焼失する大火で焼失しました。

現在の建物は、大火時に搬出された建具類と、隣村から選んだ建物部材を使用して再建されたものと伝えられており、背の高い差鴨居さしかもいを多用しているため、移築した建物の建築年代は幕末後と考えられています。また、入口周りの痕跡からみると、間口4間ほどの建物の供部分を狭くし、間口を縮めて移築したものと考えられます。現在の間口は3間4尺あるので、宿絵図に記された3間より広く、大火により町割りの再編がされたことがうかがえます。建物は大きな改築をすることなく住宅として使用されてきましたが、1997年(平成9)に旧日義村へ寄贈されました。

田中家主屋は、間口3間4尺、奥行き8間の2階建てで、2階を3尺張り出した出梁造りの建物であり、1階の格子と2階の障子戸の対比が美しい伝統的な宿場の建築様式を伝えています。間取りは、大戸の入口を入ると通り土間があり、片側1列に10畳、勝手(6坪余)、10畳があります。2階



には勝手にある箱階段から上がり、勝手の囲炉裏部分は吹き抜けとして、他は表から裏まで間仕切りのない1室になっていました。

2014年(平成26)の修復復元工事にあたり、古い部材の再使用など可能な限り建築当時の姿を保つよう配慮しながら、奥の縁側に階段を新設したほか、入口の10畳は土間へ改装、2階間仕切りなど構造補強の壁を追加するなど、交流の場としての活用を目的とした改装を行いました。

入口の持ち送りは、波しぶきの彫りもしっかりとされていて、宮ノ越大工の腕の確かさを証明しています。

日本遺産木曾路 構成文化財

⑩らっぽしよ祭り……………2章-20P参照

義仲館・徳音寺・南宮神社・林昌寺・旗拳八幡宮・巴淵

岩華観音・興禅寺

2章木曾義仲-18P参照



上ノ段の街並み

37宿場町	ふくしまじゆく
中山道 木曾路	福島宿
	町並み 木曾町
■基本データ 住所 木曾郡木曾町福島 アクセス JR「木曾福島駅」から徒歩5分 連絡先 木曾おんたけ観光局 /TEL 0264-25-6000	
	 マップQR

江戸時代後期の記録によると、福島宿は家数158戸、人口972人、本陣1軒・脇本陣1軒、問屋2軒、旅籠屋14軒という規模でした。

本陣があった場所には、現在木曾町文化交流センターが建っています。上町一帯は1927年(昭和2)の大火で焼失してしまい、江戸時代の建物は残されていませんが、本町には造り酒屋や昭和初期の町並みが続いています。

火災から免れた上ノ段地区にはかつて茶屋や商家があったといい、出梁造り・袖うだつ・千本格子など木曾地方の建築様式を伝える古い建物が残っています。一部は飲食店に改築されて人気を呼んでいます。用水や枳形、高札場跡などもあり、宿場町の面影をとどめた一画です。

「みこしまくり」の伝説

昔、飛騨国の一宮水無神社近くで戦乱が起こり、木曾から出稼ぎに来ていた信心深い宗助と幸助の兄弟は、神社が焼け落ちることを避けようと、神社の御分身を神輿に移し、木曾谷に運び出そうとしました。

ふたりは国境の峠で追っ手につかまり、神輿の奪い合いとなりました。多勢に無勢で神輿を落としてしまったふたりは、神輿をころがしてでも持ち帰ろうと、「宗助」「幸助」と互いの名前を呼び掛けあって、峠の木曾側へ神輿を転がり落とし、福島伊谷(いや)まで運んだといいます。

福島宿の水無神社で毎年行われる大祭「みこしまくり」はこのエピソードに由来します。転がすことを木曾では「まくる」といい、「みこしまくり」は宗助・幸助が転がしてきた神輿にちなんで名づけられました。

神輿は毎年新しく造っては、転がされて壊されます。担ぎ手の肩から神輿が投げ出される時に、「おみこしゃ、わが身を橋にうちかけてしんとろとろ通せ」と、神唄をうたい終わるやいなや、「宗助」「幸助」の掛け声もろとも神輿は地面に落とされ、またかつぎあげられます。壊れるほど神様はお喜びになるということで、神事は深夜まで及びます。



●木曾の夏を盛り上げる「天下の奇祭」

毎年7月22日・23日に行われる「みこしまくり」は、御輿を落とし、まくって(転がして)最後には壊してしまうという荒々しいお祭り。

開催日時/毎年7月22日・23日

開催場所/木曾福島地区・水無神社

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾樽活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)



観光・見所

① 木曽漆器発祥の地・八沢

木曽福島にある「八沢」は、中世に木曽氏が小丸山城を築いたときの城下町で、木曽漆器の発祥地といわれています。

木曽氏が漆器職人を呼び寄せて作らせたのが始まりで、その後も木曽代官の山村氏や尾張藩の庇護を受け、漆器の産地として発展しました。飛騨春慶の系統といわれる、曲物に漆を施した春慶塗が多く作られていました。

江戸時代から奈良井、平沢、藪原などとともに木曽漆器の主産地でしたが、やがてその中心は木曽平沢に移りました。町内に往時の面影はありませんが、老舗が残っています。



② 崖屋(がけや)造りの家並

わずかな土地を利用して建てられた木曽川沿いの崖屋造りの家並みは河原の親水公園から望むことができ、その木曽川にせり出すように建つ様に圧倒されます。

福島宿の中山道は本町から上の段に登り八沢に出る道でしたが、急な坂道で難所だったため、1906年(明治39)本町から西方寺下の崖を掘削し、新八沢橋を造って迂回しました。1911年(明治44)の鉄道開通に合わせて道路整備が進められ、沿道に木曽川に張り出すように家が造られました。床下の石積みは堤防を兼ね、各戸で造成しました。



日本遺産木曽路 構成文化財

- ⑫ 山村代官屋敷 3章-32P参照
- ⑬ 福島関所 4章-60P参照
- ⑬ 高瀬家 4章-94P参照
- ④① 旧帝室林野局木曾支局庁舎 5章-122P参照



興禅寺、紅葉雨の勅使門

③興禅寺(こうぜんじ)

臨済宗妙心寺派、木曾三大名刹のひとつ。1434年(永享6)、木曾義仲公菩提のため、木曾信道が荒廃していた旧寺を改建しました。俱利伽羅峠(くりからとうげ)の戦勝の際には、狼煙台であった火燃山から興禅寺まで松明行列をおこない、墓前で木曾踊りを奉納したと言われていいます。以降、木曾家、木曾代官山村家代々の菩提寺です。

境内にある義仲公御影観音堂(みえいかんのんどう)と勅使門(ちやくしもん)は1927年(昭和2)の大火で焼失後、再建されたものです。「昇龍(しょうりゅう)の庭」「須弥山(しゆみせん)の庭」「万松庭(ばんしょうてい)」と呼ばれる池泉鑑賞式の庭、重森三玲(しげもりみれい)作庭で国登録記念物の「看雲庭(かんうんてい)」も有名です。宝物殿には、木曾最古の古文書や山村氏の道具類など木曾の歴史・文化・芸術を網羅する資料が展示されています。



④大通寺(だいつうじ)

大通寺は関ヶ原の合戦の後、木曾代官の山村良勝の内室によって建立され、柱山和尚(ちゅうざんおしょう)を開山としました。鐘楼門は1778年(安永7)に建てられ、木曾町に現存する木造建築物としては最も古いもの一つ(3番目)として、1979年(昭和54)町の有形文化財に指定されています。

境内には木曾義昌に嫁いだ武田信玄の三女・真理姫の供養塔があります。真理姫は義昌の武田家からの離反や、網戸(現千葉県旭市)への国替え、夫の逝去とお家断絶などにより波乱の一生を送りましたが、晩年は木曾へ戻って98歳で亡くなりました。墓は木曾町三岳地区の野口の地にあります。



⑤水無神社(すいむじんじゃ)

木曾氏、山村氏が御嶽神社とともに崇敬したといわれる。高照姫命(たかてるひめのみこと)を御祭神とします。拝殿には江戸時代の絵馬が数多く保存されています。7月22・23日には奇祭として名高い「水無神社例大祭 みこしまくり」が開催されます。

たかせけ

高瀬家

■基本データ

住所 木曾郡木曾町福島4788

アクセス JR「木曾福島駅」から徒歩約25分、
伊那ICから30km40分

連絡先 高瀬家藤村資料館／TEL 0264-22-2802



マップQR



島崎藤村の姉・園^{その}の嫁ぎ先で、小説『家』のモデルとなった旧家。園は「お種」として作品に登場します。

高瀬家は山村氏の家臣として代々関所番を勤め、幕末まで山村家のお側役、砲術指南役、勘定役として仕えてきました。また、奇応丸を製造・販売していた家です。現在は資料館になっています。

島崎藤村は何度も姉・園を訪ねていたため、藤村の写真や愛用品をはじめ、藤村ゆかりの品々や高瀬家に代々伝わる武術や薬にまつわる品々が展示されています。

高瀬家は藤原氏の出で、九州の菊池肥後守則澄が祖先です。菊池家没落後、高瀬と姓を改めました。4代目高瀬四郎兵衛武浄が「大阪冬の陣」の頃に木曾に来て、その子である八右衛門武声が山村家に仕えた初代です。

1898年(明治31)のひと夏を、26歳の藤村は高瀬家で過ごし、詩集『夏草』を完成させています。小説『家』はこのひと夏の始まるころから書き出されており、1898年(明治31)から1910年(明治43)までの奇応丸の製造・販売していた当時の高瀬家がモデルになっています。作中では橋本家として描かれています。

高瀬家藤村資料館

開館期間 通年

開館時間 8:30～17:00

休館日 不定休 ※要問合せ

料金 一般＝大人200円・小中学生100円

障がい者＝大人100円・小中学生50円

10名以上で団体割引あり 大人180円 小中学生90円

奇応丸(きおうがん)

高瀬家7代目兼七郎新助が山村家のお供役として江戸城に上がった際に、控えの間にて奇応丸の製造方法を教わってきたと言われています。当時は生活の苦しい武士も多かったため、薬の製造を始めればその助けになり、ひいてはこの土地の潤いにつながる、と考えたようです。はっきりとした年数はわかりませんが、製造を始めたのは1673～1680(延宝年間)からです。

熊胆(ゆうたん)、高麗人參、沈香(じんこう)、麝香(じゃこう)等の高価な材料を用いた子どもから大人までの万能薬で、夜泣き、ひきつけ、吐き気、風邪気、めまい、胸の痛み等の症状に効果がありました。9代目文左衛門新助の時代になると奇応丸は徳川家の献上品になり、しだいに知れ渡っていきました。馬市にやって来た博労や御岳参りの人たちもよく買っていったそうです。

1943年(昭和18)には戦争の影響を受け、企業整備によって業業が統合されたため、しばらくはその中の一員として奇応丸を作ることになりました。1945年(昭和20)には企業整備が解除になりましたが、戦後の混乱の中では材料も手に入りづらく、また売れなくなっていました。そこに高瀬家の16、17代目が相次いで亡くなったため、1953年(昭和28)辺りで業業は終わりとなりました。



高瀬家と島崎翁助(おうすけ)

1910年(明治43)8月、妻を亡くした藤村は子どもの養育に困り、三男・翁助を高瀬家に預けました。2才からの10年間を高瀬家で育て、小学校卒業を機に藤村は翁助を迎えに来ました。

東京へ帰る前に、正面玄関で撮影した写真が館内に展示されています。



35宿場町	あげまつじゆく
中山道 木曾路	上松宿
	街道・街並み 上松町
<p>■基本データ</p> <p>住所 木曾郡上松町</p> <p>アクセス JR「上松駅」から徒歩3分(240m)</p> <p>連絡先 上松町観光協会／TEL 0264-52-1133 上松町教育委員会／TEL 0264-52-2111</p>	
	 マップQR

上松宿は1532～1555年(天文年間)に成立したといわれています。江戸から72里3町24間の位置にあり、町並みは東西に5町31間あまり。

木曾11宿のほぼ中央に位置し、問屋は2軒、旅籠屋は35軒。本陣・脇本陣とも1軒どころかも本町にありました。

上松宿は上町・本町・仲町・下町と町組が4つに区分されていますが、度重なる大火で町のほとんどが焼失し、火事を免れた上町だけに当時をしのばせる船口造りの町屋が連なります。

また明治初期にはこの付近に製糸工場があり、土蔵造りの大きな家はその頃の名残です。江戸方の入り口にかかる十王橋の手前にある高札場の跡には、道祖神をはじめかつてこの場所にあった十王堂に祀られていた石仏の数々が鎮座しています。

上松宿の歴史

1843年(天保14)の記録によると、上松宿の宿内には表通りと並行して裏道が作られ、表の街道から裏道に通じる小路が所々に設けられていました。宿場のほぼ中央に間口の広い本陣や脇本陣があり、その両側に旅籠屋が並んでいました。

宿場の民家には間口の制限があったため、どこの家でも奥行きを深くし、裏へ通じる土間を作りました。家の入口には大戸を作り、頭をかがめて抜けるくぐり戸をつけました。大戸は大きな荷物の出し入れの時には開け、夜分や冬は大戸を締め切りにしてもっぱらくぐり戸を利用しました。

当時の民家の屋根は長板葺石置き屋根ながいたぶきいしおで、切妻平入りの長屋作りきりつまひらい。2階のある家では2階の梁を一尺半(45cm)ほど街道側へ出して手すりや格子を付けた出梁造りにしていました。上町には昔の面影を色濃く残す家も現存しています。

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)



十王沢地籍から取水し上町を抜け木曾川に向かう用水が宿場用水として飲料水や使い水に使用され、非常の場合は防火用水としても利用されていました。上町には今も家並みの前に水場や用水溝が残っています。

町並みの中ほどには防火のための高塀が設けられ、町中に建つ土蔵も防火の役割を果たしました。また、火除け地として空き地を設けて防火線とし、同様の目的で小路の幅を広くした広小路が設けられました。この広小路は現在も地名として残っています。

高札場

法度や御定書などを木の板札に書き人目をひくように高く掲示した高札場は宿場の江戸側入り口(北入口)である十王橋の橋詰山手に据えられていました。



当時、十王橋の橋詰にあった十王堂に祀られていた地蔵尊は1867年(慶応3)5月におきた大

洪水で十王堂とともに一時流失しましたが、その75年後に河川で発見され、現在は対岸の山腹にあった馬頭観音とともに高札場跡に祀られています。



一里塚

江戸時代には本町と中町の間、京から65里、江戸から72里の場所に左右二基の一里塚があり、土を丸く山に盛って作られている形状から右側を「下の山」、左側を「上の山」と呼んでいましたが、現存はしておらず、現在は一里塚があった場所から30mほど下方に一里塚跡の石碑が立っています。

御料林

耕地が乏しく山に囲まれた上松宿において木曾山は共有の財産であり日々の生活に不可欠なものであり、住民たちは周辺の林野を必要に応じて自由に活用してきましたが、1889年(明治22)に旧来の禁林地区をはじめとする木曾の美林のほぼ全てが御料林に認定され、町民たちは山野から締め出されました。

これまで生活のよりどころとなっていた山のほとんどを奪われてしまった住民たちは反発運動を強めました。一方で新たな収入源として養蚕業に活路を見出す者も多かったです。



上松町では1879年(明治12)に4工場だった製糸工場が1883年(明治16)には16工場に急増しました。上町と本町の町境付近にも製糸工場があり、今も残る土蔵造りの大きな家はその名残です。



① 聖岩山 玉林院

上松宿の本町に建つ聖岩山玉林院(臨濟宗妙心寺派)は、木曾家十七代義在の弟にして須原定勝寺の三世である玉林和尚が1579年(天正7)に隠居寺として開山したと伝えられています。

寺の東浦山にある聖岩は玉林が座禅をした岩といわれ、山号はこの岩からとって聖岩山と呼びます。

1893年(明治26)に放火に遭い、本堂・庫裡は全焼したものの、土蔵と山門兼鐘楼は火災を免れました。

現在残っている土蔵は1688~1704年(元禄年間)の建造。山門鐘楼は棟札によれば1766年(明和3)11月に落成。上松町文化財に指定されています。

また、玉林院の庭園には鶴島と亀島があり江戸初期の庭園としての体裁が整っており、小さいながらもよくまとまった庭として有名です。



② 立場茶屋跡(民宿たせや・越前屋)

街道には旅人が訪れる立場茶屋(たてばちや)があります。中山道から寝覚の床へ向かう入口には、十返舎一九の「続膝栗毛」に紹介される旅籠「たせや」と蕎麦茶屋「越前屋」があり、当時の面影を残す建物が現存しています。「たせや」は2021年(令和3)に町文化財に指定されました。

● 上松宿での皇女・和宮の降嫁行列

1861年(文久元)の皇女和宮親子内親王の降嫁の際は、総数3万人の大行列が中山道を通りました。その際、道路の改修、往還に面した家屋の二階の窓を開ざして板を張りすだれなどを取り外す、朽ちた空き家などを取り壊すなど街道が整備されました。

一行の宿泊場所となった本陣は畳の入れ替えや新設・改修が行われ、本陣その他の修理・改築に629両あまり、工事のために寄せ集めた人足や馬が宿泊するための仮小屋の建造に580両あまり、合計1210両ほど費やしたといわれています。

日本遺産木曾路 構成文化財

- ④ 寝覚の床……………7章-145P参照
- ⑤ 木曾の棧……………7章-148P参照
- 小野の滝……………71P参照



水舟(定勝寺下)

39宿場町

中山道
木曾路

すはらじゆく
須原宿

建物・町並み

大桑村

■基本データ

住所 木曾郡大桑村須原
アクセス JR「須原駅」から徒歩すぐ
連絡先 大桑村観光協会
／TEL 0264-55-4566



マップQR

須原宿が設けられたのは、他の木曾の宿と同じように天文・弘治の頃と考えられています。

1715年(正徳5)の大洪水で、宿場がほとんど流され、1717年(享保2)に以前より一段高い現在の地へ移転しました。

江戸時代後期の記録によると、1842年(天保14)には宿内の家数104戸、人口748人、本陣1軒・脇本陣1軒・問屋2軒、旅籠24軒という規模でした。

須原宿の位置・町並み

上松宿へは3里9町、野尻宿へは1里24町の距離にあります。町の真ん中に用水路を通じ、町裏には「犬道」と称する抜け道を通し、宿の両入口を鍵型に折り曲げ、さらに急坂を伴わせています。さらに宿内中央で往還を「く」の字形に折り曲げ、また適時小路を設けるなど、鉄砲に対する対策がなされています。また宿内往

還端に裏山から豊富な湧水を引いて、宿内7か所に「井戸」とよぶ水場を設け、13軒から14軒単位に井戸組合を作って利用されています。須原は国道改修で町裏にバイパスが通り、最も典型的な宿場の形態を残すという町並みが昔のままの姿で静かなたたずまいをみせています。

この宿の特色として、道幅が広くとられており、非常に明るい感じを受けます。がん木造り風の長い軒を出した格子のはまった町家、道に沿って流れる用水、古風な水場など、幸田露伴の名作『風流物』の舞台となった須原宿の面影を今なお色濃くとどめています。

本陣・脇本陣

須原宿の本陣は宿村大概帳に「木村平左衛門 門構玄関付建坪136坪」とありますが、現在では民家となり、当時の面影は何も残っていません。


脇本陣は西尾氏で庄屋・問屋も兼ねていました。その末孫は今もお酒造業を営んでいます。現在の建物は1887年(明治20)の火災で焼けた後の再建で、昔の面影はとどめていません。幸い土蔵が焼け残ったため多数の宿駅関係の貴重な資料が保存されています。

(歴史の道調査報告書1)

じょうしょうじほんどう・くり・さんもん

定勝寺本堂・庫裏・山門

■基本データ

住所	木曾郡大桑村須原831-1	 <small>マップQR</small>
アクセス	JR「須原駅」から徒歩10分	
営業	8:30~17:00(冬季は16:00頃) (定休日) 無休	
料金	大人300円、子ども100円	
連絡先	定勝寺/TEL0264-55-3031	
指定等	国重要文化財(1952年)	

須原宿にある国指定重要文化財(本堂・庫裏・山門)の定勝寺は、木曾三大寺中の最古刹です。嘉慶年間^{かけい}に木曾家第11代の源親豊公が祖先菩提のため木曾川畔に創建しました。その後、木曾川の洪水により3回流失し、慶長3年に現在の場所に移建されました。

また、定勝寺には戦国時代木曾谷を支配した戦国大名「木曾義昌」の位牌が安置されているほか、東洋一の木曾ひのき製「定勝だるま」大坐像も見ものです。

定勝寺で金永という人物が、そば切りを振舞ったという、日本で一番古い文献があり、木曾谷が蕎麦の特産地であることを示しています。

そばきりの発祥

「そば切り」という言葉が日本で最初に史料で確認できるのが、定勝寺の1574年(天正2)の仏殿事記録にあります。、仏殿と奥縁壁の修理と唐戸を作らせ、この仏殿の作事記録には調達された資材、大工や鍛冶など諸職人の延べ人数と作料、酒や食事代、振る舞いの料理に至るまで詳細に記されており、その中に「そば」に関する記述が見られます。

そばきり発祥の説は他にもありますが、信州そばの歴史を研究している関保男氏によると「この史料は現在のところ信濃ばかりでなく、そば切りに関するわが国最古の史料」とのことです。

(参考資料:浄戒山定勝禅寺発行ブックレット)



本堂

禅宗寺院にみられる方丈形式の本堂で、入母屋造り、平入りの六間どり方丈。方丈とは一丈(約3m)四方の部屋の意で、禅宗寺院の住持や長老の居室をさします。

室内は、仏間のみが板敷でうぐいす張りになっており、他は畳張りで18畳の室中(仏間の前室)、その左右に8畳、12畳の間があります。

正面の両開両折の棧唐戸は狭間や透かし彫りで飾られ、三室を仕切る長押(なげし)上は竹の節欄干、仏間と室中間の長押上には吹き寄菱欄干が使われています。天井は鏡天井に張られ、正面入口のうずまき彫刻のある海老紅梁が見事です。

庫裏(くり)

庫裏は寺の食事を準備する場所(台所)、または住職やその家族の住む場所をいいます。

1654年(承応3)建立。切妻造り妻入りで、禅宗庫裏の定法に従って大きな妻壁を正面に見せます。入口を入ったところは土間と広い板の間で、大きな炉が切っておりあります。東側居間の書院の次の間には定勝時形式と称する珍しい違い棚。御座の間の長押上の壁の千羽鶴の絵は、大修理の際に張り重ねられた壁紙の中から発見されたもので、相当に古いとのこと。

山門

雨落(あまおち)石をめぐらし、自然石の上に柱が立っていて、上部にある木鼻は桃山建築の特徴を表しています。木口が丸くえぐられてくちばしのようにになっているのはシカミと呼ばれ、屋根は切妻造り檜皮葺(ひわだぶき)で、鬼板がつけてあります。1661年(万治4)に建てられました。

*雨落石:軒先から落ちた雨水の跳ね防止を意図して考えられた手法。

*切妻造(きりつまづくり、きりつまつくり):屋根の最頂部の棟から両側にかけて地上部に向かい二つの傾斜面が本を伏せたような山形をした屋根。雨水を二方へ流す形状が切妻造。一方へ流すのは片流れ。四方へ流すのは、寄棟造・宝形造・入母屋造があります。





猫寺の由来●定勝寺

大昔の定勝寺は今の小学校(旧須原小、現須原地区館)の下新国道より川寄りにあった。再度の洪水で現在の地に移ったと聞く。其の頃は、木曾川は川幅も狭く川向へ渡るにも丸太橋位であったらしい。いつ頃の住職であったか解らないが川向に法要があり、帰り道松の根元に一匹の仔猫がうずくまって居るのを見た。

和尚は今しも降り出さんとする夕立雨、かわいそうに、川の水が増水してくれば、命も危いにと衣の袖にかかえて連れ帰り以来寺で飼う事永年。不思議にこの猫は、長生し住職三代に及べり。猫三代飼へば化けると言ふ猫も既に老境に達したが、最近檀家の家畜を荒し、日毎に苦状が寺へ舞い込むが初めは和尚も畜生の事であるから聞き流しにして居たが、増々檀家の怒は、強くなるので思案の結果僧籍に有る身では殺生も出来ず、此の上寺で飼ふ事は許されず、寺より追放する以外にないと考え、方丈へ連行き今迄に無いごちそおを与え、汝猫族よ和尚三代に仕えたが、此頃のいたずらでは、是れ以上当寺に置く事は許されん此の「ごちそお」を腹一杯食べ何処へなりとも行が良いと引導を渡した。全部食べ終えて一声二声ニャーンと意味有りげに、方丈の縁下へ姿を消し以来猫の事は、すっかり忘れ去っていた。

春先のどかな或日和尚が書院で読書の折つい昼寝をし、其時の夢に近い中に尾張藩の殿様が他界する葬儀のさい中に一大異変が起きる。汝和尚よ葬儀の場所へ行き、一段と声高らかに読経せよ和尚の読経無くて異変は治まらん、必ず日時を違えず行けと、念を押し先に寺を、追放され鳴いた時と同じ様に、一声鳴いた。其の声で和尚は夢から覚めた。

数日にして尾張藩の殿様が他界し何日の葬儀と話を聞いた。和尚は数日前書院で見たゆめとぴったり当たるので、さては三代飼った猫が夢枕に立ち余りにも不思議で有ると、早速旅支度を整え尾張を差して出発した。

葬儀場近くになると今迄晴渡った初夏の空は次第に黒雲が現われ今にも大粒な雨が降り出さん空模様、葬儀の真只中天の一角より雷光と共に異様な怪描が納棺めがけて襲いかからんとした。

人々はあれよあれよと、うろたえる時定勝寺住職はひときわ高い声で読経を唱えるや、たちまち異様な怪物は姿を消し、暗雲も霧散して、元の晴天となり葬儀は終了した。

此の異変の最中に一段と高き読経を致した者は、何処の旅僧であったか後日調べた結果、木曾須原定勝寺和尚と解かり、その功により尾張藩より百石と上の山を賜り故に猫寺と云ふ。

(須原分館発行復刻版「須原」より)

はくさんじんじゃ

白山神社

■基本データ

- 住所 木曾郡大桑村大字殿1755-1
 アクセス JR「大桑駅」から徒歩約30分
 連絡先 大桑村教育委員会 / TEL 0264-55-1020
 指定 国重要文化財(建)(1937年)



マップQR

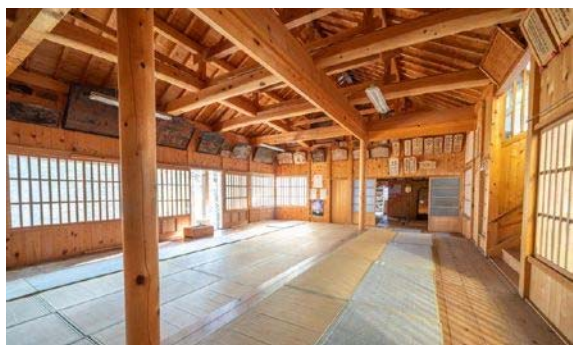
白山神社を正面に、左に熊野、伊豆、右に蔵王の四社殿が並びいづれも一間社流造いっけんしゃながれづくり松皮葺、見世棚造など鎌倉建築の技法を知ることができます。現存する社殿建築としては長野県最古のものです。

1334年(元弘4)に建立され、社殿は一間社流造で装飾的意匠が加わっていない簡素な造り、見世棚造となっています。

白山本殿のみ総立ちにおいてやや優れ、垂木の数は18本と念が入っています。

郷司ごうじ小雀部こさずべ光友みかともの大勸進だいかんじん。大工橋宗重おおいしむねふだの創建棟札が歴史の始まりを伝えています。

1937年(昭和12)国指定重要文化財に指定されました。



祭神 菊理媛命。こちらの神様は、縁結びの神様とも呼ばれていて「菊理姫尊」(「きくりひめ」とも「くくりひめ」ともよばれています。『日本書紀』の異伝(第十の一書)に一度だけ出てくる神様です。

イザナギノミコトとイザナミノミコトを仲直りさせたとして縁結びの神様とされています。

石階段をのぼって約5分、かわいい狛犬が迎えてくれます。こちらは1878年(明治11)に寄進されたもの。鎌倉末期の社殿、江戸時代から奉納されている絵馬も大型のものがあ、見ごたえがあります。



1 須原宿の水舟

水舟とは、丸太をくり抜いて作った水汲み場のことです。須原宿は江戸時代、本陣、問屋、30軒ほどの旅籠や茶屋が立ち並び、豊富な湧水をひいて宿内の17箇所に水舟が設けられていました。現在も5カ所ほどで水舟が残っています。



2 鹿島神社

須原の鎮守で、宿の入口の道に 있습니다。小木曾荘の地頭真壁氏によって勧請されたものと考えられています。戦国領主木曾氏の崇敬をうけていたもので関係資料が残っています。

蔵に保存管理の「四神旗 蒼竜・白虎・朱雀・玄武」「乗鞍」「鐙」は村有形文化財。

境内にそびえる大杉は、歌川広重画 木曾海道六十九次「須原夕立の図」の大杉と思われます。樹齢800年、高さ42m、周囲7m余。村指定天然記念物。

(歴史の道調査報告書Ⅰより)

歌川広重画 木曾海道六十九次「須原夕立の図」
..... 4章-71P参照



水舟(西尾酒造前)



岩出観音絵馬

3 岩出観音

岩出観音は木曾街道69次版画の英泉画「伊奈川橋遠景」の背景に描かれている堂として有名であり、馬産地木曾の三大馬頭観音として庶民の崇敬を受けています。現在の堂は江戸中期のもので、懸崖宝形造り(けんがいはうぎょうづくり)です。

(歴史の道調査報告書Ⅰより)

4 大桑村歴史民俗資料館

この資料館の建物は、村内の檜をはじめ木曾五木を使い、伝統的な小屋組み技法によって建てられています。

館内には、村内で出土した縄文時代から近世までの土器や遺品、近代から現代までの生活用品・民具が展示されています。また、大野遺跡から出土した人面装飾付有孔罎付土器、愛称“悠久のほほ笑み”は、その顔の大きさが日本一という貴重な土器で2018年(平成30)に長野県宝に指定されています。

人面装飾付有孔罎付土器「悠久のほほ笑み」
..... 2章-12P参照



40宿場町

のじりじゅく

野尻宿

建物・町並み
大桑村

■基本データ

住所 木曽郡大桑村野尻

アクセス JR「野尻駅」から徒歩すぐ

連絡先 大桑村観光協会
/TEL 0264-55-4566

マップQR

野尻宿が設けられたのは、他の木曽の宿と同じように天文・弘治の頃と考えられる。江戸時代後期の記録によると、1842年(天保14)には宿内の家数108戸、人口986人、本陣1軒・脇本陣1軒・問屋2軒、旅籠19軒という規模でした。

野尻宿は、寛政、文政、明治に相次ぐ大火に見舞われ、大半の家が焼失し、宿場の面影は少なくなっています。

野尻宿の位置・町並み

須原宿へは1里30町23間、三留野宿へは2里18町の距離にあります。宿を火災から守り、人馬の使用に供するために、上町から中町を通り、竹の沢へ合流する用水が引かれていました。

野尻宿は七曲りと言われるように、外敵を防ぐためにところどころ大きく曲げてあります。

この宿は、江戸方・京方それぞれ宿のはずれに「はずれ」という屋号の家があります。宿の長さは、木曽では奈良井宿に次ぐ長い街並みです。江戸方から倉坂を登りきって、左手に曲がり突き当たったところが高札場跡です。高札場の石垣が残っており、その上に民家が建っています。そのそばに南無妙法蓮華経の碑(高さ2.1m)があります。

野尻宿駅付近には、まだ大戸の残る古い民家や民宿を営む大きな木造の家が残っています。

(木曽～歴史と民俗を訪ねて～より)

本陣・脇本陣

旧本陣の森家は1894年(明治27)の大火で焼失しました。

この森家には、太田南畝も泊まっています。「野尻の駅の本陣森庄左兵衛門が家にとまる。ここも板ばめにして壁なし。されど10月9日牧野備前守といへる札あるをみれば、去年京尹より執政にめさせられし時、一夜やどしまゐらせし所なり。げに旅にしあれば、かかるいぶせき所にもやどらせ給うものかな。よもすがら雨ふる音、谷川の流れとひびきをあらそへり。」…壬戌紀行…

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曽路11宿

第5章
明治以降の木曽檜活用、
森林鉄道

第6章
木曽の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

1880年(明治13)6月27日明治天皇が京都巡幸の際この本陣を御小休所としました。

野尻駅から東へ100メートルほどの所に、旧脇本陣の木戸家があります。1600年(慶長5)関が原参戦、徳川秀忠は3万8千の軍をもって敵地木曾谷を通過。その先陣を山村良勝とともに務めた小笠原信濃守忠修の二男宗勝は良勝より野尻問屋半分を与えられ、姓を木戸彦左衛門と改名、代々襲名して庄屋職を兼ねました。1709年(宝永6)古谷久左衛門が、また1767年(明和4)森仙左衛門が庄屋をつとめています。

木戸家には、近世の木曾を知る上に大切な史料が、数多く所蔵されています。

交通関係の文書や宿絵図、土地や村関係の書類や山林絵図、問屋役を示す文書や大名宿泊の木札など、貴重な資料が多数あります。

① 七曲り(ななまがり)

野尻宿は狭く曲がりくねった町並みが特徴。外敵を防ぐために所々大きく曲げて作られた道は“七曲り”と呼ばれています。

② 龍泉庵

街道から現在の大桑小学校に向かって少し登った所に龍泉庵があります。龍泉庵は、定勝寺の飛び地境内で、野尻家益の館址でした。江戸時代初期になって、その後裔という野尻太郎左衛門が龍泉庵を創立したと伝えられています。その後1690年(貞享3)木戸彦左衛門が田畑を寄付して再建しました。境内には1774年(安永3)に建立された地蔵菩薩像(高さ202cm)があります。この地蔵は、中山道最大です。

龍泉庵はふるさとの童話作家酒井朝彦とのかかわりもあります。朝彦の伯母が定勝寺等海和尚に嫁ぎ、そこへ父を亡くした朝彦が、6歳から16歳まで暮らしました。等海和尚夫婦は晩年ここ龍泉庵で暮らしました。朝彦は、戦争中、家族で龍泉庵に疎開しました。

(歴史の道調査報告書Ⅰより)



③ 高札場跡(こうさつばあと)・いぼ石

江戸時代には高さ1丈6尺(約4m)、横3間(約5.4m)、奥行1間(約1.8m)の高札が掲げられていましたが、現在はその石垣が残るのみです。そのそばに高さ約2mの「南無妙法蓮華経」の碑があります。台座になっている大きな石は「いぼ石」と呼ばれ、その昔、イボのできた人がこの石に触れるとイボが治ったという言い伝えがあります。

④ 須佐男神社(すさのおじんじゃ)

祭神は建速素戔鳴尊(たけはやすさのおのみこと)(須佐男命)(古事記:須佐之男命日本書紀:素戔鳴尊)後世には、牛頭天王と同一としています。須佐男神社は当初、牛頭社と言われていました。掲額の表面に「天王」、裏面に1661年(寛文元)9月の文字が見え、1715年(正徳5)の災害前のもので、遺物の中ではもっとも古いものです。

● 須佐男神社例大祭

毎年7月14日・15日に開催。御輿に移御された御神体が白装束の添守によって町内に担ぎだされます。「小休石」はお祭りの小休止で御神体が置かれる石で、この石の前で舞楽が行われます。



龍泉庵地蔵菩薩



41宿場町

みどのじゆく

三留野宿

中山道
木曾路

建物・町並み


南木曾町

■基本データ

住所 南木曾町読書

アクセス JR「南木曾駅」から徒歩5分

連絡先 (一社)南木曾町観光協会
/TEL 0264-57-3123



マップQR

中山道が設置される以前から交通の要衝として、かつては妻籠宿と並び栄えた宿場です。

1881年(明治14)の大火でほとんどが焼失し、その後^{だしぼり}に建てられた出梁造りやうだつのある家が往時を偲ばせます。江戸から41番目の宿場。

三留野宿の位置・町並み

三留野宿は江戸方からいうと紅坂「べにざか(べんざかとも)」を登り詰めたところからはじまります。宿の入口に枳形があり、それを通して西側に高札場がありました。

そこから現在は新町・上仲町・下仲町・坂の下と続いています。1704年(宝永元)には本町という地名があり、1824年(文政7)には新町・上町・中町・下町・坂の下というようになっており、他に市神・坂口という地名も使われていました。

新町の部分はゆるやかな登りとなっておりますが、上仲町・下仲町と比較的急な坂道となっております。坂の下が摺鉢の底で、再び登りとなって宿を出て行きます。枳形は京方の入口にも設けられていました。

町並みの長さは1692年(元禄5)の道中奉行高木守勝への書上げによると2町40間とあり、天保期より25間長かったようです。家が街道に沿って並んでいる鉄砲町と呼ばれる町並みをなしていました。これによると、新町から坂の下までのいわゆる宿内には、東側に40軒、西側に42軒の計82軒が並んでいました。そのうち、本陣・脇本陣を除いて肩書の付いている家が36軒あり、その内訳は、百姓4、小百姓11、伝馬請役3、人足13、茶屋3、旅籠・鍛冶各1となっています。

江戸方入口にある七兵衛等のように、宿の出入口で営まれている茶屋を棒鼻の茶屋と呼んでいました。肩書のない家は伝馬役・歩行役を勤めながら旅籠を営んでいたものと推測されます。また、間口の規模別分布状態を示すと、4~5間の家が36軒で、44%弱を占め最も多く六間以上の家17軒を合わせると53軒となっています。

三留野宿の本陣・脇本陣

三留野宿の本陣は代々問屋の鮎沢家が勤めていました。鮎沢家はその系図によると、三尾将監の流れをくみ、木曾川西岸の、木曾南端から東濃地方にかけての地域の、木曾家の最前線を固めていた原家の一族です。近世になってからは、三留野宿問屋・本陣を勤めるとともに、享保の改革までは田立村の下代官でもありました。本町（現在は下仲町）にあり、建坪120坪半で、門、玄関、上段の間という本陣の三つの特徴をもったものであり、家の右半分が大名家等の休泊のための造りになっていました。

脇本陣は宮川家です。宮川家は始め年寄でしたが1806年（文化3）から三留野村の庄屋を勤めるようになり、幕末に至っています。脇

本陣の間取図は存在していないので、その全貌を知ることが出来ませんが、間口17間、奥行8間半、建坪90坪、門構、玄関附で、本町にありました。

●宿の機構

一宿に二人ずつの問屋が任命されていました。近世の宿駅は貨客の継立てや、その休泊のために設置され、これら人馬の継立て業務の最高責任者が問屋です。

庄屋が領主である尾張藩、その代官の山村家の支配下であったのに対し、問屋は幕府の道中奉行設置後は、その支配下にありました。

三留野・妻籠両宿ともに2軒ずつの問屋があり、三留野宿は勝野・鮎沢の両家が、妻籠宿は島崎（中町）・林（下町）の両家が勤めていました。

1806年（文化3）に三留野村の庄屋が勝野家から宮川家に替った際に、一時間屋も宮川家に移りましたが、間もなく問屋の方は勝野家に戻りました。また妻籠宿においても1744年（延享元）に庄屋を勝野喜助が勤めていますが、これも一時的な現象でした。

三留野宿・和宮ご降嫁

和宮の降嫁が広く世間に伝わると、世の中はさらに騒がしくなりました。降嫁の途中で宮を奪い返す動きがあるとの風説まで流れました。この風説に動かされて、江戸への道筋は、東海道から急拠中山道に変えられました。その結果道筋となる中山道の宿場・在郷はもとより、近隣の国々まで大変な騒ぎとなりました。

道中調査のため役人衆が多く入って来て、三留野宿に和宮がお泊りになることなどが決められました。降嫁の一行は江戸からの迎えが15,000人、京の付き人が10,000人、警衛の諸藩の武士が15,000人、その他助郷の人足・通し雲助など入れて計80,000人に及ぶ大行列でした。

既設の旅籠屋では到底間に合いません。そこで三留野宿の場合は、町裏の田んぼに仮小屋を急造することになりました。

田立村に建設が割り当てられた仮小屋は、建坪40坪から130坪までのもの35軒で、その建築材も田立村に割り当てられ、田立で不足した資材は隣の川上村で伐ることになり、その木材の運搬には川上の他に、加子母・付知の村々が動員されました。

仮小屋の建築は田立の他に、柿其・与川・蘭・湯舟沢・山口の村々にも割り当てられました。また、仮小屋の建築中大風で小屋が倒れ、尾張の人夫が多数怪我をして帰国したことが『大黒屋日記』に見えるので、仮小屋がけには近在の者だけでなく、遠くからも動員されていたことがわかります。

道作りも大々的に行われました。三留野の建石沢から羅天までの6つの橋が田立の割り当てで、500人余が出動しています。また田立から出した物品は、明松たいまつ4,980・わらじ300・薪30・わらなわ12束などで、これらを作りまた運搬した人足は1,169人でした。

このように、この通行のため田立から出動した人員は、延べ28,719人半でした。また、木曾下四宿（野尻・三留野・妻籠・馬籠）へ、10月29日から11月4日までの間に出た人足総数だけでも22,587人、馬は669疋となっています（和宮は11月1日、三留野宿泊りで下向していきました）。

人足は定助郷の伊那をはじめ、尾張・美濃さらに遠くは越後の頸城郡からも376人が来ていました。これらから和宮通行がいかに大きかったかがうかがえます。

『大黒屋日記』はこの行列を「前代未聞」と記していますが、80,000人余の通行とあっては、こんなことで表わすより言いようがなかったのでしょうか。この通行は雨の中の強行軍で、過労と寒さで行き倒れた人足も大勢いたと伝えられています。



天白公園



福沢桃介記念館

桃介橋・読書発電所 …………… 5章-126P参照

観光・見所

① 天白公園(てんぱくこうえん)

公園内には、ミツバツツジの群生地、桃介橋、福沢桃介記念館・山の歴史館、悲しめる乙女の像があり、見所いっぱいです。

住所:長野県木曾郡南木曾町読書

料金:無料(なぎそミツバツツジ祭開催中は協力費が必要)

定休日:無休 駐車場:あり

連絡先:南木曾町観光協会 TEL0264-57-3123

◎ミツバツツジの群生地(町の天然記念物・町花)

約400株のミツバツツジが群生し、4月中旬から見ごろ。ナギソミツバツツジはその名のとおりこの近辺にしか見られない珍種です。

◎桃介橋(国の重要文化財)

◎福沢桃介記念館・山の歴史館

開館日:3月中旬~11月末9:30~16:30

休館日:毎週水曜日

料金:大人500円 中学生250円 小学生以下無料

◎読書発電所(国の重要文化財)

●和合の枝垂梅

江戸時代、木曾谷有数の酒蔵家遠山氏の庭木として愛育されてきた古木。

●園原先生碑

三留野東山神社神官の家に生まれた園原旧富は、江戸中期の神学者で尾張・美濃・信濃に門人多数を擁していました。

●三留野宿本陣跡・枝垂梅

本陣の庭木だった枝垂梅の古木と、明治天皇御膳水が名残を留めています。

●廿三夜塔

二十三日の遅い月の出を拝み、豊作などを祈る民俗信仰の塔です。



三留野宿本陣枝垂梅



②等覚寺(とうかくじ)

山門に立派な仁王像があります。円空堂で韋駄天像など3組の円空仏が拝観出来ます。

営業時間:円空堂は8:00~17:00

料金:境内自由(円空堂は拝観100円) 定休日:無休
連絡先:TEL 0264-57-2445 駐車場:あり/50台



かぶと観音

かぶと観音 2章-19P参照

◎古典庵・与川の秋月(木曾八景)

仲秋の名月はここから眺めると、周囲の地形とあいまって大きく見事です。またここは、江戸時代初期に僧庵「古典庵」のあったところでもあります。

木曾八景 7章-143P参照

◎白山神社の大杉

大杉は2本あり、一本は目通り周囲8.2m、ほかの一本は6.7mの巨木です。また、春と秋の例祭には神社に神楽獅子が奉納されます。

柿其溪谷 7章-151P参照

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)



構成文化財³⁰

つまごじゆくほぞんちく

妻籠宿保存地区

42宿場町

中山道
木曾路

つまごじゆく

妻籠宿

建物・町並み・重伝建(宿場町)

南木曾町

■基本データ

- 住所** 木曾郡南木曾町吾妻
- アクセス** JR「南木曾駅」から徒歩40分、
保神・馬籠行きバスで10分(妻籠下車)
中津川ICから約30分
- 連絡先** (公財)妻籠を愛する会／TEL 0264-57-3513
(一社)南木曾町観光協会／TEL 0264-57-3123
- 指定** 国重要伝統的建造物群保存地区(1976年)



マップQR

中山道の42番目の宿場。蘭川東岸^{あらざがわ}に位置し、隣接する43番目の宿場・馬籠宿と併せて観光地としてよく知られています。

江戸時代ののんびりした雰囲気伝える町並みが美しく保存されており、1976年(昭和51)に日本初の重要伝統的建造物群保存地区に選ばれ、町並み保存運動のさきがけ、木曾路ブームの推進役となりました。保存地区面積は1245.4haです。

宿場内の下町、中町、上町と続く町並みは明治以降たびたびの火災で焼けており、江戸期の建物が多いわけではありませんが、昔の姿を再現することに努めたことで往時の景観を彷彿とさせています。枳形から南の寺下エリアは、木曾路

のなかでも奈良井と並んで保存状態が極めて良い地区です。

家の多くは平入り・出し梁・格子戸の造りであり、デザインが統一されているため宿場の雰囲気^{ふんぎ}に一体感があります。

宿場の歴史

つまごじゆく
妻籠宿は室町時代、東濃の岩村を本拠とする遠山氏によって木曾谷の南の備えとして整備した山城妻籠城^{つまごじょう}の麓^{ふもと}に形成されました。江戸時代中期、規模は南北約250m程と木曾路11宿では小さな方ではありましたが、江戸中期には人口は800人を超えていました。これは、31軒もの旅籠と地場産業に従事する人口が多かったことによります。

徳川家康から中山道の宿場に指定されたのは1601年(慶長6)でしたが、それ以前から当地を支配していた木曾氏が、南部における美濃や伊那に対する拠点として重視していたといわれています。1642年(寛永19)の記録によれば、妻籠村の家数は54軒、人口は337人(男154、女183)でした。

●妻籠を愛する会

妻籠宿の町並み保存運動の中心となっているのは公益財団法人「妻籠を愛する会」です。1968年（昭和43）の設立以来、家や土地を「売らない・貸さない・こわさない」という3原則のもとに、妻籠の観光開発は、自然環境も含めた宿場景観の保存以外にはありえないという考え方を確認し、地元住民を中心とした保存事業を徹底しています。

具体的には、宿内一部の石畳の復元、道標や標示板の設置、高札場の復元、中山道の公衆便所設置、宿内の電柱を裏通りに移すといった活動をしてきました。宿場景観の保持に努めています。なお、3原則は住民憲章に明記されています。

「妻籠の町並みが火事で焼けることなく残ってきたのは、江戸時代に一晚に4回火の用心をし、そのうち3回は（家の者を起こして）火の元の確認をせい、というお触れが出ていたからだといわれています。

その伝統はずっと守られ、いまでも3軒にひとつ消火栓があるほどです。妻籠は景観保全に力を入れ、むやみに観光地化しなかったことが、地域としての今の成功につながったと思います。観光地化しないことが最高の観光開発であるということです。

とくに欧米からのお客さんはウォーキングを好み、昔の姿がそのまま残っていることに価値を見出してくれます」

（妻籠を愛する会）

●馬籠峠トレッキング

中山道は妻籠一馬籠間で「馬籠峠」を越えることになります。この峠越えのトレッキングコースは人気で、近年は欧・米・豪を主とする外国人旅行者が多くいます。令和元年度はこのコースを歩く旅行者の実に7割近くが外国人旅行者となっています。

<馬籠峠を越える旅行者数（ ）内は外国人旅行者>

2016年度45,400人 (23,200人)	2017年度47,900人 (26,100人)
2018年度49,800人 (31,400人)	2019年度56,900人 (37,800人)
2020年度11,500人 (1,100人)	2021年度13,600人 (900人)

① 日本最初的人力車

光徳寺の庫裏(くり)には、明治初期の遂応和尚が考案し、乗っていた車付駕籠が展示されている。日本初的人力車ともいわれる乗り物で、和尚はこれに乗り、京都まで行ったことがあるとの伝承が残っています。

② 黒縄屋のモデルになった上丁子屋

十返舎一九『続膝栗毛』で、京都から善光寺へ向かう途中、妻籠で弥次喜多が宿泊する黒股屋のモデルが上丁子屋です。実際に十返舎一九が宿泊したといわれ、馬を繋ぐための小さな輪を今も見ることができます。

明治天皇の巡幸

1880年（明治13）明治天皇巡幸の折に、脇陣陣奥谷が御小休所となりました。ここで山菜のシオデ（幻の山菜、山のアスパラガスと呼ばれている。群生しないため大量に採取できない）を食された明治天皇は「これを籠いっぱい欲しい」と所望されたといわれます。明治天皇は「上段の間」で休まりました。



③ 汗かき地蔵(延命地蔵)

「1813年（文化10）のある日、蘭川の河原の大きな石に地蔵の寝姿が現れたため、村中が大騒ぎとなった。そこで、光徳寺住職の中外和尚と村人たちで地蔵をこまごまで運び上げて祀った」という言い伝えが残っています。

4月23、24日におこなわれる例祭の頃、お地蔵様は女性の業苦を代わりに引き受けるためにびっしょりと汗をかくだと信仰され、汗かき地蔵と呼ばれています。

ディスカバー・ジャパン

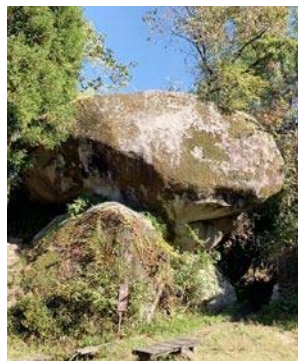
1970年の大阪万博終了後、国鉄（現JR）が始めた「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンは人々のレジャー欲を駆り立て、当時創刊された女性誌『an・an』『non・no』を手元に旅行を楽しむ「アンノン族」が各地にあふれました。

このブームの中で木曾路は大きな注目を集め、『平凡パンチ』の表紙を描いたイラストレーター・大橋歩を起用した木曾路のCMも制作されました。この影響を強く受けたのが妻籠で、5年の間に妻籠を訪れる観光客は10倍近くになったともいわれます。



4 郵便資料館

島崎藤村『夜明け前』にも開局当時の様子が描かれています。妻籠郵便局に併設され、資料約270点が展示されています。料金不要。(土・日・祝休館)



5 鯉岩

妻籠宿入り口左側。『木曾路名所図会』に描かれた、中山道名三石のひとつ。当時は鯉の滝登りのように直立していましたが、1891年(明治24)の濃尾大地震で上部が横倒しになりました。(町指定 名勝)

6 藤原家住宅

大妻籠集落にある、17世紀半ばまでさかのぼる古い建築物。希望者は見学可能。料金不要。(県宝)

● 妻籠宿案内

妻籠宿案内人の会のガイドが案内してくれる。案内人1名につき15名まで。

案内料は各コース、有料。②～④は施設入館料が加わる完全予約制(10日～2週間前に予約)。「妻籠宿案内依頼書」にてFAXまたは郵送で申し込み下さい。

妻籠宿案内人の会 / Tel&Fax.0264-57-3513

- ①お気軽コース 30分
- ②本陣コース 45分
- ③脇本陣奥谷本陣コース 60分
- ④歴史探訪コース 90分

7 男滝女滝

吉川英治の『宮本武蔵』で、武蔵が修行し、またお通との恋物語の舞台となった滝。小説では男垂(おたる)の滝となっています。右奥に女滝があります。

日本遺産木曾路 構成文化財

- ⑫ 史跡 中山道……………4章-61P参照
- ⑬ 妻籠城跡……………2章-30P参照
- ⑭ 一石栃立場茶屋……………4章-62P参照

● 妻籠 南木曾ハイキングコース

妻籠宿内水車小屋前-天白公園のコース。距離は3.8km。

■主要参考文献 / 『妻籠宿』(小寺武久 中央公論美術出版社 1989)

『中山道 風の旅 軽井沢-馬籠編』(テレビ埼玉・群馬テレビ編 さきたま出版会 2004)
『木曾-歴史と民俗を訪ねて-』(木曾教育会郷土館部編著 信教出版部 2010)

はやしけじゅうたく

林家住宅

■基本データ

- 住所** 木曾郡南木曾町吾妻2190
- アクセス** JR「南木曾駅」から徒歩40分
保神・馬籠行きバス10分(妻籠下車)
中津川ICから約30分
- 連絡先** 南木曾町博物館 / TEL 0264-57-3322
- 指定** 国重要文化財(2001年)



マップQR



妻籠宿で、代々、脇本陣・問屋を勤めてきました。将軍家茂の御簾中として御降嫁した皇女和宮は、中山道ご通行の折に妻籠宿で昼食をとられました。現在の建物は1877年(明治10)にそれまで禁制であったヒノキをふんだんに使い、当時の粋を集めて建てたものです。また、島崎藤村の初恋の相手「ゆふ」さんの嫁ぎ先でもあります。



林家住宅(脇本陣奥谷)



妻籠宿本陣

島崎藤村と本陣・脇本陣奥谷

「木曾路はすべて山の中である。あるところは「そば」^{そば} 唄づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いていた。」

この有名な文章で始まる『夜明け前』を書いた島崎藤村(本名:春樹1872-1943)は、馬籠に生まれましたが妻籠にも縁が深く、本陣は母の生家、最後の当主は実兄・広助でした。脇本陣奥谷をつとめていた林家は、『夜明け前』では扇屋得左衛門の名で登場します。

また、藤村の詩「若菜集～初恋」の女性と言われる、幼馴染の「ゆふ」さんが馬籠から嫁いできた家でもあります。


●南木曾町博物館

妻籠宿内にある博物館で、脇本陣奥谷(林家住宅・国重要文化財指定)と、江戸時代後期の間取図をもとに復元された妻籠宿本陣、資料館の3館。

- 住所:木曾郡南木曾町吾妻2190
- 営業時間:9:00~17:00(最終入館は閉館15分前)
- 休館日:12月29日~1月1日
- 料金:脇本陣奥谷+資料館(大人600円 小人300円)
- 妻籠宿本陣(大人300円 小人150円)
- 全巻共通券(大人700円 小人350円)
- 連絡先:TEL 0264-57-3322



43宿場町	まごめじゆく 馬籠宿
中山道 木曾路	建物・町並み 中津川市

■基本データ		 <small>マップQR</small>
住所	岐阜県中津川市馬籠	
アクセス	JR「中津川駅」から 北恵那バス馬籠行(30分)～馬籠終点 中央高速バス馬籠バス停(神坂P.A. 内)から徒歩20分 中津川ICから約30分 中津川IC(木曾福島方面)→国道19号線 沖田交差点→馬籠(25分) 【無料駐車場利用 ※普通車300台・大型30台】	
連絡先	馬籠観光協会(馬籠宿観光案内所) /TEL 0573-69-2336 開館時間 8:30～17:00(冬期は9:00～17:00)	

中山道の43番目の宿場で、木曾路11宿最南端、美濃側の入口として栄えていました。急峻な坂道に築かれているため、宿場内の民家は石垣を築いて屋敷地を確保していました。大雨から守るために敷かれた石畳や、宿場に敵の進入を防ぐため街道を鉤の手に曲げた枅形などが、当時の雰囲気漂わせています。

歴史的背景

馬籠宿は尾張藩の領地で、江戸からの距離は83里6町4間といわれ、街道は南北に貫通していて、町並みは約600m続きます。

1843年(天保14)年の中山道宿村大概帳によると、本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠18軒、家数69軒で、宿場の規模は小さかったといえます。街道が急な尾根に沿った急斜面を通っているため、石垣を築いて屋敷を造る、坂のある宿場が特徴です。

馬籠宿の大火

馬籠宿は度々火災に見舞われていますが、最も古い火災記録は、1639年(寛永16)2月11日に発生した大火で、宿内の31軒のうち20軒が焼失しました。その後江戸時代には大火と言われる火災が2度発生しており、1858年(安政5)の大火では47軒が焼失し、1860年(万延元)の大火では16軒の家屋と6棟の土蔵が焼失しました。

明治時代以降も2度の大火に見舞われています。特に1895年(明治28)の大火は馬籠宿最大の火災で、64軒の家屋と14棟の土蔵を焼失し、それまでの江戸時代の宿場としての馬籠集落の遺構が消滅しました。



馬籠宿枅形付近

しまざきとうそんたく

島崎藤村宅

(まごめじゆくほんじん)あと

(馬籠宿本陣)跡

■基本データ

- 住所 中津川市馬籠4256-1
 連絡先 藤村記念館／TEL 0573-69-2047
 ホームページ <http://toson.jp>
 指定 県史跡(2005年)



マップQR



歴史的背景

馬籠宿の本陣島崎家は、相模国三浦郡久郷村の三浦氏を先祖とし、1558年(永禄元)島崎重通が馬籠に移り住み中興の祖となりました。1600年(慶長5)関ヶ原の戦いには馬籠の砦を固め、その功績により馬籠の代官を勤めるようになりました。島崎家の屋敷は現在の位置よりも落合寄りにありましたが、1639年(寛永16)の火災により現在の位置に移り、1703年(元禄16)からは本陣・問屋・庄屋を兼ねるようになりました。

1860年(万延元)の火災により本陣の建物は焼失しましたが、隠居所は火災を免れ、その後、1861年(文久元)本陣の建物は再建されました。

明治維新を迎え宿駅制度は廃止。1872年(明治5)島崎藤村が生まれ、9歳まで馬籠で暮らしましたが、1881年(明治14)勉学のため上京しました。1893年(明治26)本陣の建物と土地を売却して島崎一家は上京。

1895年(明治28)馬籠宿の大火により本陣の建物は焼失しましたが、隠居所だけは火災を免れ現存しています。

ふるさとの生んだ文豪・島崎藤村の生家跡であり、中山道木曽路の馬籠宿本陣跡という交通史上の遺跡としても重要です。さらに、島崎藤村の代表作であり近代歴史文学の記念碑的著作である『夜明け前』の舞台となった場所です。

1969年(昭和44)7月3日長野県史跡に指定され、その後、岐阜県中津川市への越県合併により2005年(平成17)9月6日に岐阜県史跡に改めて指定されました。そして、2020年(令和2)6月19日に日本遺産に追加認定されました。

●島崎藤村

1872年(明治5)筑摩県馬籠村(現岐阜県中津川市馬籠)に父正樹・母縫の7人兄弟の末っ子として生まれました。そして9歳まで馬籠で育ち、勉学のため上京します。明治学院卒業後、明治女学校、東北学院、小諸義塾で教師を務めながら、詩集『若菜集』『一葉舟』『夏草』『落梅集』を発刊します。処女詩集『若菜集』は日本近代詩の輝かしい出発を告げる画期的な位置を占めるものとなりました。

1906年(明治39)日本の自然主義文学の先駆けとなる『破戒』を出版し小説家に転身します。その後『春』『家』『嵐』『新生』などを刊行していきます。

1929年(昭和4)から1935年(昭和10)の足かけ7年間にわたって「中央公論」に『夜明け前』を連載します。「木曽路はすべて山の中である」という有名な書き出しで始まる『夜明け前』の中心舞台は木曽馬籠の本陣で、主人公は父正樹でした。幕末から明治維新の激動の日本をはじめ、木曽路や中津川宿など広範囲にわたって物語は展開されていきます。



●藤村記念館

1945年(昭和20)藤村と交流のあった英文学者菊池重三郎氏は、戦火を逃れて馬籠に疎開し、隠居所を寓居としており、菊池氏と馬籠の人々の出会いが藤村堂建設の発端となりました。そして1947年(昭和22)「文豪島崎藤村を顕彰するものを造りたい」と考えた馬籠の青壮年により、ふるさと友の会が結成され、勤労奉仕により藤村堂が建てられました。

設計は建築家谷口吉郎博士によるもので、回廊と障壁と冠木門(かぶきもん)からなる奈良朝様式の建物です。1950年(昭和25)に財団法人藤村記念郷が発足しました。1952年(昭和27)に長野県下の小中高大学からの寄付等により、展示施設の第一文庫が作られ、全国に先駆けた文学館となりました。1955年(昭和30)博物館相当施設の指定を受け、展示施設の充実のため1971年(昭和46)第二文庫を、1983年(昭和58)には第三文庫を建設しました。

文化財の隠居所建物は2006年(平成18)解体修理が行なわれ、2010年(平成22)には第二文庫を立て替えました。

●藤村の藤村文庫の想い。 「つくるのであれば馬籠本陣の隠居所に・・・」

1936年(昭和11)、木曾教育会が紀元2600年記念事業として藤村記念文庫の建設を思い立ちました。

1940年(昭和15)に上京して藤村に相談したところ「作ってくださるならばあの隠居所に・・・」という言葉がありました。しかし1941年(昭和16)日本は太平洋戦争に突入し、藤村記念文庫建設の話は頓挫しました。



『夜明け前』原稿

■主要参考文献／

『図録島崎藤村』(藤村記念館編2009)

『島崎藤村生家の建築』

(NPO 法人 信州伝統的建造物保存技術研究会編 藤村記念館発行2006)

『藤村記念館だより No.114 号』(藤村記念館発行2006)

『藤村記念館50年誌』(藤村記念館発行1997)

『藤村記念郷30年誌』(藤村記念館発行1979)

『山口村誌上・下巻』(山口村1995)

『木曾馬籠』(中央公論美術出版 菊池重三郎1977)

『新潮日本文学アルバム 島崎藤村』(新潮社1984)



●水車小屋

樹形の隣に、大きな水車小屋が建っており、現在は水車を利用して小水力発電を行い、宿場内の照明などに活用されています。

●陣場展望台

恵那山と中津川恵那方面が一望できる絶景の場所。『夜明け前』直筆原稿の碑などがあります。

●峠集落

峠集落は妻籠宿と馬籠祝の間宿(あいのしゅく)として発展し、藤村の『夜明け前』にも登場する牛方(うしかた)の家屋等の建造物群が保存されている集落です。

●馬籠の文学碑

馬籠宿には中山道に沿ってたくさんの文学碑等が建っています。

- ・「是より北木曾路」藤村揮毫
- ・芭蕉の句碑「送られつ 送りつ果ては 木曾の穂(あき)」
- ・正岡子規の句碑「桑の実の 木曾路出づれば 麦穂かな」
- ・島崎藤村詩碑「母を葬るの歌」
- ・島崎藤村詩碑「初恋」
- ・山口誓子の句碑「街道の 坂に熟柿 火を点す」
- ・十返舎一九の句碑
- 「浚皮のむけし女は見えねども栗のこわめしここの名物」
- ・正岡子規の句碑「白雲や 青葉若葉の 三十里」



① 高札場(こうさつば)

馬籠宿の坂を上りきった所を陣場といい、ここには高札場が建てられていました。現在は高札場が復元されており、『正徳元年御高札之写』の資料から、1711年(正徳元)の高札が6札(親子兄弟札、キリシタン札、毒薬札、火付札、駄賃札(2札))掲げられています。

② 永昌寺(えいしょうじ)

1665年(寛文5)創建の臨済宗の古刹で、『夜明け前』では万福寺の名で登場します。

本陣島崎家の菩提寺であり、島崎藤村の遺骨は終馬の地である、神奈川大磯の地福寺に埋葬されていますが、遺髪、爪などは、永昌寺に埋葬されています。藤村の夫人と娘の墓石は藤村がデザインしたといわれています。

本堂脇のお堂には「木造阿弥陀如来坐像」(中津川市指定有形文化財)と円空作による「木造聖観音立像」(中津川市指定有形文化財)が安置されています。



③ 榎馬屋資料館(つちまやしりょうかん)

榎馬屋は湯舟沢村の庄屋を務めていたため、江戸時代以降の村政に関する資料が多く保存されており、古文書を中心に展示されています。



④ 清水屋資料館(しみずやしりょうかん)

代々馬籠宿役人を務めていた原家は島崎藤村とも親交が深く、藤村に関する資料が数多く保存されています。また、7代目当主が収集した古美術品も多数あり、これらの資料が展示されています。